

言語学（一）

— 言語と人間の社会 —

田 中 みどり

第一章 人類^{ヒト}の言語

- 一、猿人から現生人類へ
- 二、サルとヒト
- 三、ヒトの特徴
- 四、抽象能力

第二章 集団と言語

- 一、分節言語
- 二、言語の分類
- 三、集団と言語

人類^{ヒト}の起源や人類^{ヒト}の言語の起源については、さまざまな説が立てられている。しかし、まだまだ説明されていないことが多く、魅力ある諸説のうち、どれが正しいかはわからないのが現状である。第一章では、これまでにかわっていることをもとにして、人類^{ヒト}および人類^{ヒト}の言語の特性をさぐった。

第二章では、集団と言語との関係、書記言語が集団に及ぼした影響、これからの社会のあり方と言語について考えた（この章は、今後、さらに詳しく考察したいと考えている）。

第一章 人類^{ヒト}の言語

一、猿人から現生人類へ

私たち人間はある集団の中に生まれる。その集団は、集団内部の社会を構成し、集団を維持していくための約束事（制度・法律に至る）を有し、その集団特有の文化を形成し、集団内に通用する言語を有っている。

いつの頃からそのような集団が成立していたのかはわからない。しかし、類人猿などの比較や、古い化石・骨、洞・住居跡などの研究によって、以上のことが新人成立時にはすでに行なわれていたと推測されている。

考古学・人類学・遺伝子^{遺伝子}学の研究から、これまでさまざまのことが明らかにされているが、最近の発掘や研究の進展はめざましく、ほとんど毎日のように新しい発見や新説が発表されている。発見された一つの事実は、分析する方法の違いによっていくつもの説を産み、また、そこから考え出されているシナリオは千差万別である。

それらの発掘・研究によって、さらに明らかにされていくであろうが、現在のところ、猿人から現生人類まで、人類には五〇〇万年から六〇〇万年の歴史があると推定されている。

猿人	五〇〇万年前～一〇〇万年前
原人	一八〇万年前（一五〇万年前）～二〇万年前
旧人	二〇万年前～三万五千年前
新人	三万五千年前～

人類^{ヒト}の進化の過程は、全て解明できているわけではないが、遺伝子の研究の成果によって、現生人類は、二〇万年前（三〇万年前～一五万年前という説もある）にアフリカに生きていた原人の血をひくものである、という説が欧米では有力視されている。その他、

(1) 人類は、アフリカのチンパンジーやゴリラなどの仲間の類人猿から分かれたとする説と、アジアのオランウータンなどの仲間の類人猿から分かれたとする説がある。

遺伝学の研究から、人類は遺伝的にアフリカの類人猿により近く、約五〇〇万年前の第三期鮮新世に類人猿と分かれた、また、アジアの類人猿とはそれよりもさらに一〇〇〇万年以上前に分かれた、という説をとる人が多い。

(2) 一七〇～一八〇万年前にホモ・エレクトス（原人）が出現したと考えられているが、最初のアジア人が一六〇～一八〇万年前に出現したとする説もあり、この場合、原人の出現がもっと古いと考

えるか、アジア人が人類の祖先であると考えるか、あるいは人類が多地域で進化したと考えるか、説が分かれている。

(3) 原人の起源はひとつと考えた上で、

① 原人も新人もアフリカ起源で、交替したとする説(単一起源説)

② 原人がアフリカを出、各地で旧人、新人になっていたとする説(多地域進化説)

③ 原人も旧人も新人もアフリカ起源で、各地で混血しながら、現生人類に至ったとする説

④ 東西の進化の様相の違いを考慮して、東では多地域進化説のような形、西ではアフリカ起源説のような形を想定する、東西二地域進化説

など、さまざまな説が存在する。

(以上、

○ 東京大学出版会『モンゴロイドの地球』〔1〕
〔5〕 1995・5・9

○ リチャード・リーキー著、馬場悠男訳『ヒトはいつから人間になったか』草思社 1996・

2

○ スティーブン・ピンカー著、椋田直子訳『言語を生みだす本能』(上・下) NHKブックス

その他、を参考にした。)

人類の祖の進化の過程の説や移動のシナリオはさまざまにあるが、少なくとも、二足歩行し、手を用い、道具を作り、火を使い、分節言語を有する——すなわち、これまで言われてきた人類の特徴を備えた——段階にまで至った人類の子孫がわれわれ現生人類である、ということだけは言えるであろう。

現在この地上で知られている人類は、全てこれらの特徴を有しているし、稀に「発見」されるそれまで知られていなかった人々の集団も、これをはずれるものではない。すなわち、四足歩行するものや、道具を使わないもの、火を恐れるもの、分節言語を話さないもの、はいまだかつて発見されたためしがない。とすれば、現生人類の祖は、同じひとつの祖から分かれたものとする説が、最も説得力のある説である、ということになる。別に発達した異種(ないし異類)間の混血であるならば、その発達の差によって、いずれかの特徴を異にする種も存在してもよさそうなのに、皆一様にこれらの特徴を備えているからである。あるいは、そうしたさまざまな異なった特徴を有つ人類が淘汰されていつて現在の人類のみが残ったのであるならば、このような形になった最初の混血種が現在の人類の祖であるという

ことであり、やはり単一の祖ということに帰着する。

また、現生人類と猿人類・猿類・その他の動物などの特徴を較べてみる時、全く異なったルートで発達した人類が、全く同じ変異を経験したと言うには、あまりにも現生人類のそれぞれの種の差は小さすぎるのである。

地球上に生命が誕生した一点があり、環境に適応するため変異が起こりそれが遺伝子の中に組み込まれて新しい種・新しい類が誕生する一点がある。であるならば、人類の祖も、或る一つの（あるいは同じ時期に同じ地点で同じ変異を経験したいくつかの）個体より発する、と言つてよい。

現生人類の祖も同じである。ならば、現生人類の祖は、ひとりの（ないし幾人かの）イヴである。上述の人類の特徴を兼ね備え、また遺伝子レヴェルでのさまざまな現生人類の特徴を有したイヴは、たしかにひとり（ないし幾人か）居たのである。

遺伝子学者はそれを二〇万年前（あるいは一五万年前、三〇万年前）のことと推定している。それが何年前のことであり、どこに発したか、新人・旧人・原人・猿人のどの段階にまでさかのぼることができるものであるのか……という問題は、大きなテーマであり、それがわかることによってさまざまなことが解明できるが、今は、現生人類が同じ一つの祖から発した、ということを確認することができれば

よい。

現生人類は同じ一つの祖から発したと推測することができ、その遠い祖先はチンパンジーやゴリラあるいはオランウータンなどの類人猿の祖と分かれたものであると言われている。人類の祖が、食糧も豊富で天敵の少ない森を出て、現在のような生き物になったのは何故なのだろうか。

アフリカ東部に地殻変動が起き、大地溝帯ができた。その西側の森林地帯では以前と同じ生活ができたが、東側の乾燥の進む草原地帯に残されたサルたちは、新しい環境に適応しなければ絶滅するという危機に直面した。

四足歩行よりエネルギー消費の少なくてすむ二足歩行をし、肉を食糧とするようになり、そのための道具を利用し、また道具類を創作することで、サルたちは生存に成功した。

そして、直立姿勢をとることは首や咽頭にかかる重力を減じ、咽頭を音声器官として使うことを有利にした。このことと、肉食するようになってアミノ酸などの栄養に変化が生じ、脳が発達したことが相俟って、人類の分節言語が発達した。

これが、欧米で強く支持されている、人類の進化と言語獲

得のシナリオである。

劣悪な条件のもと、適応できなければ死滅するほかないという厳しい状況に置かれたことが、人類の知能を発達させ、二足歩行し、道具を使い、火を用い、分節言語を話すなどの特徴を有つ生き物に変化させてきた、というのはまさに説得力のある考え方で、これで人類の進化と言語の起源は十分に説明できるように見える。

しかしながら、一方で、

(1) 人類の起源はアジアである

(2) 元謀原人は一七〇〇一八〇万年前に生存していた

(3) 中国には、一〇〇万年前の遺跡が数多く見つかった

(4) 日本の上高森遺跡（宮城県）は六〇万年前のもの
と推定され、ここからは精巧な石器が出土した

など、アジア側の発見の中には欧米の考え方をくつがえすものがいくつもあり、それらをめぐって欧米との間に論争が展開されている、というのが現状である。欧米の人々の発想の根底には、

○ ヨーロッパとアフリカとは地理的に近く、ネグロイドとコーカソイドとが遺伝学的に近似して

いる
という事実と

○ 欧米人は肉食である

○ 欧米人にとって自然は克服するものである

○ 欧米ではキリスト教の考え方が強く、動物より人間を優位に置こうとする

などの基本的生活習慣とがあつて、その上にシナリオを構築するため、植物食で自然に包まれて生きるアジアの人々の発想とはくい違ふことが多いことも、論争の原因の一つである。

アジアの研究者の中には、

○ 人類の祖は、もともと植物食であつたのがしだいに肉食をするようになっていった。ハンターであるよりは肉食獣の餌食であつた。

○ それ故、四足歩行であつたものが二足歩行になつたことは、走る速度が遅くなつたということであつて、他の動物の食糧となる危険性が大きくなつたということにはかならない。

○ 肉食するようになって、体躯が大きくなつたであろう。

○ 肉食をしていたとみられるアウストラロピテクス・エチオピクスは絶滅し、一方、道具を意図

的に製作するようになったホモ・ハビリスは、さまざまのものを食糧とすることができるようになり、生存競争にうち克った。

などの論を展開する人もある。研究者によってニュアンスはさまざまで、欧米の研究者とアジアの研究者ということでグループを分けることのできるものでもないが、おおむね欧米の研究者たちは、肉食をすることで人類の祖が進化していったことを疑ってはいないようである。彼らは自らの体質上、自然にそのように考えるのであり、一方、植物食のアジアの研究者たちが植物食に目を向けるのも、これも自然のことである。何千年、何万年かけて培ってきた体質は、ものの考え方までも規定してしまっている。その上にうち立てられたシナリオはそれぞれに魅力があるが、研究者によって異なる様々のシナリオは、それらのシナリオがまだまだ未知の部分を多くかかえたものであることの証しでもある。

二、サルとヒト

ヒトの起源^(注)を求めて、骨や石器や遺伝子が研究されてきたが、一方、霊長類の研究によってそれを証かそうとしてきた人々もある。チンパンジーとヒトの遺伝子のちがいは一％であるという。それを一％しか違わないと見る人もあ

れば一％も違っていると見る人もある。

ところで、動物園のサルや人里に出没するサルくらいしか見たことのない、私たち一般人が陥りやすい誤りは、ヒトはサルから進化したという説を聞いた時に、

現在のサル達が太古から生存していて、その一部のものが類人猿になり、そのまた一部のものがヒトになった

と誤ってしまうという誤りである。

ニホンザルもゴリラもチンパンジーもオランウータンも何万年か前のヒトの姿である

とイメージしてしまう誤りである。現実のニホンザルもチンパンジーもオランウータンも、遠い昔には別の形態をもっていたのは、私たちヒトと同じことである。彼らも彼らの方向に進化してきたのである。

それ故、現実のサル達はサル達で、太古とは異なった形態や特性を獲得しているという可能性を忘れて、ヒトの祖に投影するならば、ありもしない祖ができあがることもあり得るのである。サルの祖を知るには、ヒトの祖と同じように、化石などによって調べていかなければならない。それが一点でヒトの祖と一致し、また当時の生態系の全てが解明された時にはじめて、進化論の系統樹は完成する

のである。私たち一般の人間は、そのことを忘れて、ついつい動物園のサル達を遠い祖先と思ってしまう。このことはよくよく心しておかなければならないことである。

さて、サルとヒトとはよく似ている。目が顔面に並び、色覚を有っているのは哺乳類の中では霊長類だけであると言われている（ただし、近年、イヌなどにも色覚があるらしいことがわかってきている）。四足歩行のサルが、時に二足歩行をすることがあるのも、サルが石でナッツを割ったり小枝でアリ釣りをしたりして道具を利用することも、ヒトと似ている。ヒトの社会に近づいて生活しているサルやヒトに飼育されているサルの中には、たき火にあたったりライターの火をつけたたりできる者があることを見れば、積極的に火を使用するのではなくとも、少なくとも彼らが火を恐れないことを確かめることもできる。また、サルは分節言語を有っていないが、鳴き声を使い分けてコミュニケーションをしもある。彼らもまた集団で生活し、その社会には約束事があり、集団特有の文化を形成している。

こうしてみると、ヒトの特徴と言われる二足歩行、道具使用、火の利用、分節言語、集団内の約束事などは、太古の霊長類にその芽があると言ってもよさそうである。言われるように、サルとヒトとがその祖を同じくし、ヒトが現

在のように進化してきたというのであるならば、それはどうしてなのか。その理由はわからないまでも、そのことによって何が変化したのであろうか。何が可能になったのであろうか。

（注一）これまで「人類^{ヒト}」という表記をしてきたが、

へ二、サルとヒト^{ヒト}の項では、サルとヒトとの生物学的対比ということで、「ヒト」という表記を用いる。以下の記述でも、「ヒト」と表記した際は、これに同じ。

三、ヒトの特徴

a、目

霊長類の目は顔の前面に並んでいて、立体的にものを視るのに役立っている。それはもともと、樹上生活をする上で、樹々の間をとり移ったりするための適応であったと言われている。草原の彼方にいる獲物や敵を見定めることに較べれば、樹上をとり移る生活は、近い距離を正確に測ることを要求される。チンパンジーがアリのような小さな生き物を獲ったりすることから見て、その目は細かいものを見るのに適していると考えられる。

b、色覚

色覚があるのは、哺乳類の中では霊長類だけである、と言われてきた。ただ、近年、イヌにも色覚のあることが考えられており、色覚で霊長類を特徴づけるのはむしろ少しくなってきた。それでも、嗅覚が弱く、視覚・色覚がモノの弁別に大きく役立っている点から、霊長類の特徴を考えることが、少しはできる。

霊長類の嗅覚は弱い。他の哺乳類は嗅覚が発達していて、食糧を捜す際や敵を見つける際などに、この嗅覚が重要な役割を果たしているのである。色覚は、チョウやミツバチなどにもあることが知られている。チョウやミツバチの色覚は、蜜を得る花を弁別するために重要な役割を果たしているから、霊長類の色覚も、やはり、もともと食糧を弁別するために発達したことは確かである。

ミツバチは、アリとともに、群棲して巣を作り、社会を構成することで知られる。その分業・管理システムは、ヒトの分業社会・管理社会に通ずる点も、注目される。ミツバチはまた、例の8の字のダンスによっても、早くからその伝達能力に注目されてきた存在である。これらの点でもヒトは、他の動物と似るよりもミツバチの特徴を身につけていったかのようである。このような類似点を見ると、色覚があったとしても、嗅覚を主な手がかりにして食糧を捜

す他の哺乳類とは異なり、ヒト（霊長類）の色覚が相当高度に発達していることが考えられる。

c、食糧

ミツバチの色覚は、蜜のある花をみつけるためのものである。同じように、霊長類の色覚も食糧獲得のためのものと考えられる。が、その食糧の種類は汎汎にわたる。天敵のほとんどいない森の中で、敵を嗅ぎ分ける必要がないために嗅覚が退化していったかわりに、霊長類は、食べる興味を増大させていったのであろうか。

食糧を獲得するに際して、毒のある植物を見分けるために色覚が発達したのではないかと考える人もある。それが色覚発達のかっけであるかどうかはわからないが、色覚があることで、たとえば毒きのこと食べられるきのこを色の鮮やかさで見分けることに役立っていることは確かである。だがしかし、なぜ毒性のあるものとそうでないものを見分ける必要があるのか。たとえば蜜のある花を食べるというように、食糧として一定のものを食べているのであれば、わざわざ毒性のあるものとそうでないものを見分ける必要はなく、食糧となるものだけを捜せばよいはずである。そのように毒性のあるものとそうでないものを見分けなければならないのは、きまりきったものだけ

を食糧にしているのではなく、食べられるものは何でも食べようと試みているからにほかならない。

私は、そこに、食べることに對する興味と、さまざまのものを口に入れて食してみる好奇心を見る。ヒトは、熱帯から地球上の各地に散らばり、それぞれの地で得られる動植物を食糧として、その地に適応していったが、それはさまざまのものを食してみる好奇心なくして適うことではない。それゆえ、さまざまのものを食してみる好奇心は、人類がそれまでとは異なつた土地にも適応していくための重要な資質のひとつである。

d、二足歩行——手と道具

霊長類は食糧を食べる時、前肢を用いる。森では、樹々の間を移動する際にこの前肢で木の枝をつかみもする。しかし、平地を歩く時には、前肢も用いて四足歩行である。四足歩行は、走る時には、二足歩行であるよりずっと速く走ることができる。

ところが、人類^{ヒト}の祖は、樹上生活を離れ、森を出た。その原因は、大地溝帯の東側にとり残されたせいであるのか、(アフリカとは限らないが)人類発生の地で氣候変動や人口増大や闘争があつたせいであるのか、好奇心のゆえであるのかはわからない。ともあれ、人類^{ヒト}の祖は森を出た。森

では樹々の間を移動する際に前肢が重要な役割を果たしていたが、森の外ではその用はなくなつてしまつた。現在の霊長類と同じく、太古の霊長類の前肢も、食糧を食べる際などにも活躍していたであろうが、その前肢に樹々の間をとび移る仕事がなくなつた時、そのエネルギーは他の役割に振り向けられたであらう。それは、駿馬のように走ることにふり向けられず、木の枝や食糧などをつかむ動作の延長で別の役割をするようになった。また後肢は、地上を歩くのに便利ないように変化していき、やがて直立二足歩行をするようになっていった。

四足歩行に較べ、二足歩行はスピードが遅い。食糧を得るにも、他の動物の食糧にされることをまぬがれるにも、駿足であることの方が有利であるにもかかわらず、人類は敢えてスピードの遅い二足歩行をするようになった。であるから、このことに利点があるのでなければなるまい。

○ 前肢で食物を運搬して、安全な場所に確保することができ

○ 立ちあがり視線が高くなつたことで、獲物や敵をみつけやすくなつた

○ 歩行スピードが低下したこと、消費エネルギーが軽減した

○ 日射に直接さらされる体表面積を少なくするこ

とが、ストレスおよび運動エネルギーの消費を軽減した

など、二足歩行のメリットはいろいろ考えられているが（赤澤威、『モンゴロイドの地球（I）』p、31）、

以上とりあげたメリットが本当にどれほど生存戦略として優れた特点となったかは、はなはだ疑わしいようである。なかでも二足歩行は四足歩行に比べて移動のスピード性および機敏な行動という点ではいちじるしく不利な運動形態であることは疑いようがない。ところがそれは道具を使わずに獲物を獲得するうえで欠かせないもつとも基本的な能力である。それにあわせて要求される形質が強固な歯牙そして蹄、筋力が有する殺傷力である。二足歩行を獲得した人類は結局それらすべての能力を失ったことを意味する。それは二足歩行により獲得したと想像されるメリット、しかもきわめてあやふやな生存戦略に比べ、はるかに重要な資質を失ったことを意味している。（赤澤威、前掲書、p、31、p、32）

というように、二足歩行は非常に不利な生存形態であるようである。だがしかし、弱肉強食とはいっても地球上には、

草食動物もいる。彼らは感覚を鋭ぎすまして、肉食動物の餌食になることをまぬがれようと努力している。人類の粗も、不利なように見えて、むしろ二足歩行が有利であったからこそ、絶滅することなく生き長らえたのではないか。

ホモ・ハビリスとは別の道を進んだアウストラロピテクス・エチオピクスの仲間が絶滅した。どちらがより肉食にかなうていたかは、研究者によつて意見が対立するが、例をあげれば、

赤澤氏は、ホモ・ハビリスが基本的には植物食であるが、加工石器の存在から、以前にもまして肉食率が高くなったと考えられる、とする（赤澤威、前掲書、p、33）

のに対し、

リーキーは、ホモ・ハビリスが肉食であると考えている（リーキー『ヒトはいつから人間になったか』p、79）。

エチオピテクスよりは華奢なホモ・ハビリスの方が残った、という事実が存在する。

ホモ・ハビリスは道具を作った。現存する類人猿の中にも、石でナッツを割ったり小枝でアリ釣りをしたりイモの葉をかざして雨をよけたりするものがあるが、そのようなところから進んで、しだいに意図的に道具を製作するよう

になったのが、ホモ・ハビリスである。ここで、現在みつかつて初期の道具類が、いずれも食糧を得るためのもの（食用の具・調理具）であることは注意を要する。ヒトの祖が道具を作り始めたのは食べるためであった、ということである。（やがては、狩猟の道具や敵を防ぐための武器も発達していくこととなる。）

森で樹々の間をとび移る時に重要な役割を果たしていた手（前肢）は、しだいに細かい作業をするようになり、さらに人類は、意図的に道具を製作するようになった。人類が細部に注意を向け始めたことと、直立二足歩行の鈍い歩みとは、対応することであるであらう。走るの二本より四本の足で走った方が速く走れるが、その場合の前肢は細かい作業には適しない。手は作業用に変化し、足は歩行用に変化していったのである。

こうして、樹上生活で重要な役割をしていた目と手とが、細かい作業を可能にし、二足歩行をするようになった人類は、速く走ることはできないが、細かい作業をしたりものごとを注意深く見たりするようになっていったのであろう。これが、人類が二足歩行をするようになったことで得た利点である。

e、火

いつの頃からか人類は火を手に入れた。熱帯の太陽に灼けた石の上に置いた食糧が変質することを体験から知っていたのであろう人類は、木と木とがこすれ合って山火事が起きたり、石器と石器の摩擦熱から火の出ることがあるのを見て、積極的に火を用いるようになったのであろう。まずは調理。そしてまた、火は、外敵から身を護るにも効果を発揮したであらう。火は、衣服や住居とともに、人類が寒冷の地に進出していく際に、大きな力となっていくものであった。

空を飛ぶこともできず、速く走ることもできず、腕力も無く、鋭い牙や爪を有っているわけでもない、それ自身は極めて非力なヒトが、他の動物から身を護り、食物を手におさめるために得た、身の外の強力な補助手段が、道具であり火であった。（また、気候・風土から身を護るために考案した身の外の強力な補助手段が、衣服であり住居であった。）

f、分節言語

こうして人類は直立二足歩行し道具を使い火を用いるようになった。直立の姿勢は喉頭の位置を下げることにになり、人類が以前より複雑な音声を出して分節言語を話すことに

なる下地を作った。サルは鳴き声や鳥の囀りなども、仲間
に伝達する内容によつて何種類かの型のあることが観察さ
れているが、人類^{ヒト}の分節言語は、それらよりはるかに複雑
に発達しているものようである。

サルや鳥は鳴き声や囀りなど、音声を使い分けて仲間と
コミュニケーションをする。音声を用いない植物も、色や
匂い・味・形・触感などを用いて情報を伝達するから、少
なくとも生物には、何らかの形で伝達する能力が備わって
いることがわかる。それは、生物が個体を有つということ
と表裏をなす事柄である。生まれ、運動し、生長し、繁殖
し、死ぬ存在は、他者との間に関わりを有たざるを得ない
のである。動物は移動する分、植物より自由であり、自由
であるということは、それだけ自らの決断を余儀なくされ
るということである。植物のように一定の位置で葉を繁ら
せ根を伸ばして生命維持をはかるのではなく、動物は自ら
食糧を捜し、外敵から身を護らなければならない。そのた
めの情報を仲間との間で伝達する必要が動物にはある。
個々別々に身体に分かれていた動物が伝達するためには、
姿の見えない所にも届き、いくつかのヴァリエーションの
可能なものである方がよい。哺乳類や鳥ではそれは音声
(ヒトの聴力の外の周波数のものは、人間には振動の形で
とらえられるものもある)が最も発達した手段となった。

ヒトに近いサル達の鳴き声の使い分けも、まだ十分には
わかっていない。しかし、分節言語に至る可能性のあるも
のであることは、わずかながらもキー・ボードを使つてヒ
トとコミュニケーションをすることのできるボノボ・チン
パンジーのカンジによつて推測できる。

ヒトに育てられたボノボ・チンパンジーのカンジが、
キー・ボードを使つてヒトに意志の伝達をするのは、それ
だけの判断能力がカンジにあることの証しで、ヒトと同じ
発声はできないながら、カンジの脳の内部にヒトと同じよ
うな判断回路の作られていることは明かである。類の違い
によつて、ヒトと同じ発声はできなくても、ヒトに育てら
れることによつてヒトの思考方法に即した思考がある程度
できるカンジは、発声さえ与えられればヒトと口頭で意志
を通じるであらう。

脳は発達している。要は、音声器官の問題である。であ
るならば、ヒトに育てられているのではない野生のボノボ・
チンパンジーたち、またヒトに育てられていてもヒトの言
語形式によつてヒトと意志の疎通をしないボノボ・チンパ
ンジーたちの間には、彼らの言語にもとづいたかなり複雑
な意志の疎通が行なわれていることが推測できるのである。
オウムの中にも、ヒトと会話するものも居る。また、ヒ
トに飼われているイヌとヒトとは、ある程度意志の疎通が

できる。したがって、以上のことは、類人猿ないし霊長類について言えるだけのことではなく、動物全般にも広げることのできることであるかもしれない。

さらに、音楽を聴かせたり人間が言葉をかけたりすると生育のよくなる植物もあるというから、範囲は動物の域にとどまらないかもしれないのである。

ではあっても、ヒトの音声言語は、発達した音声器官を用いていろいろな音を出せるところから、組み合わせの変化も大きく、したがって情報量が他の生物たちより格段に大きいであろうことは容易に想像されることである。

g、創意工夫

こうしてみると、二足歩行し、道具を使い、火を用い、分節言語を話す、という人類の特徴はすべて、霊長類にその萌芽があつて、そこから発展してきたものと見做すこともできる。ただ、厳しい状況に置かれて絶滅した生物に比べて、人類の祖は、努力し創意工夫する能力を有ち、困難にうち克つて、生存に成功したのであるから、そのこと（努力・創意工夫）が、人類の最大の特徴である、と言うこともできる。

類人猿をはじめサル達は、森を離れることはなかった。しかしながら人類は、樹から下り、森を出、赤道近くの熱

帯の生活のみならず、寒冷な土地にまで足をのびしていった。肉食・火・衣類や住居の工夫が、寒冷な土地に住する基盤を作り、やがて身体も異なった気候風土に適応して変化していったのであるが、極北の地や高山など気候風土の厳しい土地に暮らす現在の人々を見る時、その人々はそこに生まれたからそこに暮らしているにすぎないのであろうが、何ゆえそうまでして極北の地や高山に住むのか、と気候風土の穏やかな土地に住する人々は疑問を抱かずにはいられない。遠い昔に、その地に住むことを決めた彼らの祖先は、どのような思いでその地に住みはじめたのであろうか。気候の変化により食糧を求めて移動したのか、人口の増大によりはじき出されたのか、闘争の末逃げ込んだのか、あるいは冒険心のゆえか。集団により事情は異なるであろうが、気温が摂氏マイナス五十度の地であれ、標高四千メートルの地であれ、昼夜の温度差が三十度にもなる砂漠地帯であれ、そこに最初に住んだ人にとってその気候風土は、食糧や安全性を考慮すれば、それまで暮らしていた土地に較べれば耐えられるものであつた、あるいはより良いものであつた、からのことであらう。また、現代の人々が、高山や深海や極地や宇宙など、未知の世界を知りたいと思つたり冒険したり、あるいは、スポーツ競技でより高い記録をめざしたり、さらには、仕事や日常を含む広い領域に

において、好んで、より困難な状況に身を置いたりする場合のあることなどから考えて、人類が困難を求めたり、より良い生活を志向したり、好奇心から新天地をめざしたりする性質を有していることも認められる。

考古学の発掘の成果により、森を出た人類の祖は、長く熱帯・亜熱帯の地にとどまり、温帯以北に進出したのは百万年前より五百万年前のことであろうと考えられている。人類の祖がアフリカに誕生したと考える人々は、まずアフリカからアジアの熱帯・亜熱帯に移動し、ついで温帯・寒帯へと進出していったと考える。この点、アジア起源も考える人々に比べ、熱帯・亜熱帯の中で移動という一段階がひとつ多く考えられていることになる。が、いずれにしても、初期の人々は移動を考えてはいなかったと考ええるという点では同じである。移動が、気候変動のゆえであるのか、食糧を追っていったためであるのか、もともと好奇心が強いせいであるのか、はわからないが、上述のような、人類が困難を求めたり、より良い生活を志向したり、好奇心から新天地をめざしたりする性質は、移動の過程でより大きくなっていったであろう。これも人類の特徴のひとつである。

前に食糧について述べたところ（P、202）で、人類にはさまざまなものを口に入れて食してみる好奇心があつて、

それがそれまでとは異なつた土地にも適応していくための重要な資質のひとつである、と述べたが、むしろ、そのような好奇心があるからこそ、人類は移動し、熱帯から極北の地にまで住むようになった、と言えるかもしれない。

四、抽象能力

動物は本能で行動する、と古い時代には言われてきたのであつたが、動物にも鳴き声や身振りによる伝達行為があり、カテゴリー化する能力や判断力があることが、現在では正當に理解されつつあるだろう。仲間の死に、悲しげな声で鳴き、涙を流すゾウの姿の映像（97・NHK放映）も記憶にあたらしい（J・M・マッソン／S・マッカーシー著、小梨直訳『ゾウがすすり泣くとき』河出書房新社 1996・11、にも詳しい記述がある）。

ゾウ達は、亡骸を取り囲み、長い時間悲しみの鳴き声をあげ、涙を流して、仲間の死を悼み、自らの大切なものを失したことを嘆く。やがて隊列は立ち去り難い思いを振り切つて歩き始める。森の中で、彼らは飲む水・食糧や寝処を捜さなければならぬ。同時に、森の中には、彼らを餌食にしようとする敵も存在する故、一つ所にじつとどまり続けるわけにもいかなないのである。

ヒトは森を出、水や木の実や草・小動物などを採集・獲

得ししやすい場所に集まつて住むようになる（移動の場合と定住の場合とがあるが）。そして、いつの頃からか、ヒトは墓所を造り始めた。それはゾウには見られない習慣である。ゾウたちに哀悼の気持のあることは確認できても、彼らは墓所を造りはしない。他方、手を用い、食物を加工し住居や衣類を作るヒトは、仲間の死に際して、墓を造るのである。風葬・鳥葬など、ごく稀に墓を造らない場合が現代にもあるが、少なくとも死者および遺された者たちのための葬儀は行なわれている。

遠い時代の人々が、死をどのように考えていたのかは解らない。死の穢れを怖れたという見方もあるが、哀悼の思いもなかったとは言えまい。ゾウなどの事例に照らせば、ヒトにも、それ以前の段階（類人猿ないしサル）から、哀悼の思いがあったと考える方が自然である。

人間の存在の中で、最も不可思議なものが「へ生死」である。「へ死」に直面した時、翻つて、「へ生」とは何か、という間も切実になる。ゾウたちは、そのようなことを考えるであろうか。おそらく考えていよう。しかし、ゾウとの交信のできない私たち人間は、ゾウの考えていることを想像することしかできない。

彼らゾウは、死骸に別れを告げて歩き出す。墓所を造ることはいないし、また、再びその地を訪れて花を手向ける

ことはなさそうである。ヒトがいつから墓所を造り始めたのかは定かではないが、旧人の遺跡のうちにそれが見られ、新人の遺跡には呪術的な壁画や道具と考えられるものが遺っている。

手を用いることは、食糧を得たり棲處を整えたり仲間とコミュニケーションをしたりすることにとどまらず、モノを作り出すことに進んだが、そこに作り出されるものも、実用の具から葬儀や呪術の具にまで至ったのであった。葬儀を営んだり呪術を施したりするのは、非常に高度な抽象能力であつて、そのための具を作ることは、抽象能力の具象化というさらなる抽象能力のあらわれである。ここに、非常に高度な抽象能力というのは、一言で言うならば、カミを創り出す能力、ということである。

現在私たちが知っている宗教は、何らかの形でみな「へ死」と関わっている。「へ葬儀」と関わっている。人間より大きな存在（ヘカミ）を創り上げることによって、人間は「へ死」にまつわる畏れを安んじようとしてきたのである。

一方、食糧の獲得・気候の安定・他者との闘争など、人間の「へ生存」に関わる事柄に際しても、人間は「ヘカミ」に祈る。人知ではかり知ることのできない大きな力の存在に気づき、それに名（カミ）を付ける。これは極めて高度な抽象能力である。

動物（人間も含む）の、日々の食糧と寝る処を確保する生活に必要なものは、食糧をみつける才覚とそれを得る能力と、敵や気候から身を護ることである。それらは身体に備わるもので、人間はそれを「本能」と呼んでいる。

人類が道具を創り出したのは、他の動物たちのように爪や牙や腕力や速く走る力や羽を有っていなかったためである。自らの有っていないものを補うために道具を作る「創意工夫する知恵」とさまざまなもの・ことに興味をもつ「好奇心」とを有ったことで、人類は生きのびたのかもしれない。やがて人類は、寒冷な地にも適応する能力を身につけて、地球の各地に散らばっていった。「好奇心」は、しかし、「未知のもの」の存在とその背後にある不確かさの闇をさらに深くする。食糧、気候、敵、老・病・死に關する恐れをどうにかしたいという思いのつた時、人類は、自らの力の及ばないことどもを統べる存在を想定することで、護られる安心を得ようと、「カミ」を創り出した。この、「カミ」を創り出した能力は、「言語」（他の動物たちの言語も含む）を創り出した能力の延長上にある。「おいしいもの」や「危険なもの」を一つ一つ名付け、また、総合する能力は、世界を知り、自らを知り、社会を作る原動力であった。が、「知る」ことは、「（自らが）知らないことを知る」ことにもつながり、推測したり、想像し

たり、論証したりもする一方で、知れば知るほどに不可解なことがらも増大していったからである。

個体を有った動物・植物は、他者から発された色・形・振動・音・匂い・味・触感などから或る報らせを読みとる。また、他者に何らかの事柄を伝達するために、色・形・振動・音・匂い・味・触感などさまざまなものを用いる。人間の聴力の周波数の外のものは人間には振動の形で伝わる場合もあるが、そういった研究はまだ十分になされてはならず、人間が音声として把握することのできる鳴き声や囁きの研究もまだ始められたばかりである。人間と異なつた類について何ほどのことがわかつているわけでもないが、私たち人間の観察する限りにおいて、人間の分節言語は他の動物の鳴き声や囁きに較べるとはるかに多くの組み合わせが可能で、はるかに多くの情報を伝えることのできるものようである。

喜び・悲しみ・怒りなどの感情や子どもをあやしたり叱ったりすること、危急を報らせることなど、現在の状況に即応したことでなく、過去や未来のことを考えたり、或ることを仮定したり想像したり、肯定したり否定したり、人間は言葉によってさまざまなことを考え、また、他者に伝えている。人間の言語がそのように発達していったのは、

第二章 集団と言語

一、分節言語

動物はみな、概念識別能力・カテゴリー能力や判断力を有っている。「おいしい」「危険だ」などの内容を表わす鳴き声や動作などは、それぞれに有る。そして、それらをいくつか組み合わせで伝達しているものも観察されている。

人類の言語も、当初は、「食べ物」「子」「仲間」「おいしい」「危険だ」などのような一語的なものであったであろう。さらに、それらをいくつか組み合わせで伝達していたであろう。一語・一語文は、やがて判断文になる。

現在、地球上で話されている言語は、形こそ違え、その分節の能力において発達したものと未発達なものというレヴェルの差はない。前に、言語は話さないなどの、現生人類の特徴から外れる人類の種は存在しないから、現生人類はひとりの（あるいは幾人かの）イヴを祖とする、と述べた（P、196、P、197）。そうして地球の各地に散らばった人々の言語が、現代、分節の能力においてレヴェルの差がないのであるから、分節言語という現代の言語のレヴェルはすでにイヴの時代に達成されていたものであることも確かである。それが新人の時代のことであるのか、旧人の時

そうする必要にせまられてのことであろう。森を出たヒトの祖が、そこで絶えてしまうことなく生きのびていくには、それに応じた知恵が必要であつたし、仲間との協力が必要であつたであろう。ヒトは、森からはじきだされたのか自らの冒険心でとびだしたのかはわからないが、いずれにしても、未知の世界に生きる上での恐怖や不安がさまざまなことを考えさせたであろうし、また、知恵を伝え心を通わせることでヒトは大きな力を得たであろう。それが、人間の分節言語が複雑であることと、人間においてヘカミンを頂点とするような抽象思考が発達したことの基底であろうと考えられる。すなわち、人間の言語が分節言語という複雑に発達したものであることと、人間において抽象思考が発達していることとは、軌を一にするものである。

そして、そのような音声言語を可能にしたのは直立二足歩行であつたが、手が細かい作業をするように発達し、細部に注意を向け、二足歩行であるため動きが鈍くなったこともまた、じつくりものを考えることを用意するものでもあつたのである。

代のことであるのか、原人の時代のことであるのか、猿人の時代のことであるのかはわからない。しかし、現生人類の祖が成立した時点ですでに、言語は現在のような分節の能力を有ったものにできあがっていたのである。

二、言語の分類

言語は、形態の上から、包含語・膠着語・屈折語・孤立語に分類されてきた。しかし、どの言語も（膠着語なら膠着語のように）一つの形態型におさまるものではなく、部分的には他の形態型の特徴を有している。

また近年は、統語のあり方によって言語を分類することが試みられている。主語S・動詞V・目的語Oの語順がSVOであるもの・SOVであるもの・VSOであるもの・VOSであるもの・OSVであるもの・OVSであるもの六つの型が想定され、そのいずれの型の言語も存在するという（SVO型・SOV型・VSO型が大半を占める）。語順は、形容詞の前置・後置などとも密接につながっており、語順による類型分類は、それぞれの言語の判断型を示唆するものである。ただし、この分類も、現存の諸言語が、必ずしも典型的な様相のみを示すわけではないことは、形態による分類の場合と同じである。

文字資料の遺るものや、その後の言語変化をもとに文字

資料以前の言語の姿を想定し得るものを除いては、私たちの知り得る言語の歴史はあまりにも短い期間のものだけに限られる。もともとは一つであったであろう人類の言語が、どのように拡散し、人々のものの考え方の変化に伴ってどのように変化し、また、人々の交流によってどのような影響を受けたのかは、知る術がない。

それゆえ、私たちが、形態上の分類にせよ統語による分類にせよ、それを見て知ることのできるのは、ただか数千年に満たない最近の人類の言語のあり方やものの考え方であるにすぎない。それ以前にその地に住み、現在の人々と血縁を有する人々であっても、全く異なった言語を話していた可能性はいくらもあるのである。

であるから、言語の型を見て言えることは、古い時代の人々の移動の歴史ではなく、現在（数千年来）の人々のもの（ヒト）の考え方とその変化である。今、その中から、へ孤立語としての近代英語へ（SVO型とSOV型）について述べる。

a、近代英語

印欧語の多くは屈折語であるが、仏語では、以前は発音していた音を現在では発音しないために、人称・数・性・格に応じた語形変化が、話し言葉では失なわれているもの

がある。

このことは、近代英語ではさらにはつきりしており、書き言葉においても語形変化の簡略化した近代英語は、語順が文法機能を果たす点、中国語などと同じ孤立語のおもむきを呈している。このことは、英語を話す人々の文法意識に変化をきたし、ものの考え方も変化させるものである。

かつて、屈折語が最も進化した言語であると、ヨーロッパの人々は思っていたのであったが、語形変化があるゆえに語順が自由であった印欧語は、実は、もともとSOV型であったものからSVO型に移行する過渡的な姿として、厳密な語形変化を要求していたものである、と見ることができる。

b、SVO型とSOV型

次に、話者人口の多い、SVO型とSOV型の言語について考えてみよう。この二つの型の言語を較べてみると、SVO型は帰納型・SOV型は演繹型である、と言える。SVO型は中国語や印欧語、SOV型は日本語や東南アジア語に多い形式である。これは、そのまま、狩猟民族と農耕民族の分布にあてはまるものである。狩猟が、自然と対峙し、一瞬一瞬の決断を要する行為であるのに対し、農耕

は、自然の循環の中で、自然に身をゆだねて、種子を蒔き育て収穫する行為である。帰納法と演繹法とは、その作業にちようによく適合している。狩猟をこととすることと農耕をこととすることとが、人々の判断形式をつくりあげ、その言語の型を決めさせた、と考えることはできないだろう。

ところで、中国では、黄河流域に百万年前の稲作の跡が見つかっている。一方、印欧語は古くはSOV型であった。——そうした事実は、現在それらの土地に住む人々とかつてそこに住んだ人々とが同系であるのかどうか、また、その人々がどのような歴史を経て来たのか、ということが明らかにならないかぎり、即座に、SVO型が狩猟民族・SOV型が農耕民族のものの考え方を反映したものと考えるということの、反証とすることの難しいものである。

現在（数千年来）そこに居住している人々の生活習慣やものの考え方を見る限りでは、現在の人々とその言語の判断型は、やはり合っているのである。

赤澤威氏は『モンゴロイドの地球（上）』（P、74、P、75）の中で、アフリカ大地溝帯を出た人類^{ヒト}の祖は、まず死海のほとりに定住し、そこで農耕生活を始めたという説を立てておられる。（人類^{ヒト}の祖が大地溝帯に生まれたとは考えない研究者も、少なくともコーカソイドの祖は大地溝帯

に生まれたと考えているので、今の場合、この説に沿って考えて支障はないのであるが）それならば、欧米の論者の考え方とは逆に、かつてSOV型の言語をもっていたコーカソイドは、その当時は農耕民族であったのであるが、北に移動するうちに狩猟中心の生活をするようになって、判断形式が帰納型になり、それが言語の上にも反映されて、SVO型の言語をもつようになった、と想定することができさる。

三、集団と言語

a、価値

大陸の各地に散らばった人々は、血縁を中心に構成された集団を作つて、狩猟・採集によつて日々の衣食住を確保する生活をする、原始共同生活を営んでいた。その集団の中には、男女、長幼に応じた役割の分担があり、集団をまとめ守る統率者が存在したのであろう。狩猟・採集生活に最も適した土地は、肉食獣の危険が少なく、植生が豊かで、水のある所である。

やがて人々は、食用植物を栽培したり、生け捕りにした食用動物を飼育したりするようになった。農耕・畜産は、食糧を恒常的に取得することを可能にし、定住を可能にした。

狩猟・採集生活は食糧をみつける才覚を要したが、農耕・畜産は、定住し、人間の意志に基づいて食糧を計画的に生産・蓄積する生活である。狩猟・採集は獲物と人口密度のバランスが必要のため集団が大きすぎでは困るが、効率のよい生産生活は、集団の規模を拡大させた。そうして仕事の分業化は進み、一方では共同生活の要素も多岐にわたり複雑になり増大していった。また、狩猟・採集生活においては集団の衣食住に必要な量以上のモノは基本的に不要であつたが、生産・蓄積することのできる生活においては、蓄積したモノを他の集団との交易の具とすることも行なわれるようになった。そうして、余剰品を物々交換するのではなく、蓄積が力であることが生じたのである。

それは、一つの集団と他の集団との力の強弱でもあると同時に、一つの集団の中での力の強弱にも反映され、支配者（統率者は、ここで支配者に転換する）が税を徴収する形を生み出す。税は食糧・獣皮・布・鉱物・宝石や労役・兵役などの形で納められるものであつたが、それらが価値の基準を示すものであるところから、やがては金貨・銀貨・銅貨のような抽象的な貨幣を生み出すことになる（後には紙幣や商業手形・小切手、さらに近年は電子マネーなるものも考案されている）。

このような、蓄積が力となり得、交易がさかんになり、

富が力となり、支配者が被支配者に税を課す、という集團のあり方が生まれるのは、農耕・畜産による定住生活が契機となつてゐる。

人類は二足歩行し、道具を用い、火を使い、分節言語を話すようになり、抽象的なカミを創り出した。定住して農耕・畜産を行なうようになった人々は、ここで新たな抽象を「価値」の上に創り出したのである。

b、文字

血縁集團から部族国家・王朝国家・都市国家などが形成されていくにしたがつて、集團の人口は増え、役割は分化し（職業が生まれ）、人々のものの考え方もさまざまになる社会になつていった。

狩猟・採集生活においては、食糧の確保や氣候の順不順などは全て授かりものであるため、人々の、そして集團の、生き方・死に方を支えるものは、その風土・その社会に即した「ヘカミン」であつた。そこでは、「ヘカミン」の意志が常に意識されたが、人間が自らの意志に基づいて食糧を生産・蓄積する社会においては、「ヘカミン」は幾分背後に退き、より抽象的な存在となる。自らの意志に基づいて生産を行なう人々には、「自らの意志」がより強く意識される。そして、その人々の意志を統率する「政りごと」が「祀りこ

と」から分離し、法・税制が整えられ、商業・交易の約束ごとが整備されていった。

そのような中から、文字が生まれた。

人は初め、自らや食糧のある位置を地理的把握したり、集團の構成員や獲物の数を数えたりする時、「目印」を付することを思いついたであろうし、計画的な農耕・畜産には「覚え」が必要となつてくる。さらに、交易や課税が行なわれるようになると、「記録」が必要になつて、目印や覚えは「記号」や「符丁」となり、やがて「文字」を生み出した。

また他方、魔除けのための「呪符」や占いの結果あらわれた「象」が、神の託宣や神に祈る言葉を記号化することにつながり、そこから「文字」が生み出された。

c、古代国家

視覚的なものは聴覚的なものに較べて保存がきき、記憶に耐えるが、「記憶」が必要となるところに、人間存在の特性も見出される。身体に備わる記憶のみでは生きていけないほどに社会が複雑化している一方で、ヒトは、身体に備わつてゐた能力も忘れていったのである。

経済が、現物を物々交換することから、貨幣という抽象物を媒介とすることに發展していったと同じように、音声

言語を書記言語で記すようになった時、言語は新しい発展をすることになる。

書記言語が考案されたことによって、言語は、複雑な論理の展開の可能なものになった。しかし、身体的な音声の伴わない書記言語は、人間の存在から切り離された、論理のための論理さえ可能となるものである。そして、声の届く範囲を超える書記言語は、個々の人間を無視した一方的なものとなる弊害さえ含みもするものである。

そのような危険をはらみながらも、書記言語は発達していき、経済や祭祀・政治のみならず、集団の叙事詩や日常の抒情歌などをも写すようになり、やがては歴史書なども書かれるようになっていった。

現在においても、文字を有たない人々もあることを見ても、この「書記」という記憶術がなくとも集団を維持することが可能であることは明らかである。だがしかし、その人々の集団の規模の大きくはないことも確かである。「音声言語」は「声の届く範囲」にしか届かないのであるから、当然、集団は声の届く範囲に限られるのである。「文字」による伝達が可能になり、声の届かぬ範囲にまで勢力をいきわたらせることができるようになって、集団はその規模を大きくすることができたのである。「文字」は、記憶術であるだけでなく、また、神との交信の具（呪術）である

だけでなく、為政者の集団掌握の手段、人と人との伝達の手段ともなっていたわけである。

古代国家は、氏族集団がその範囲を広げ他の集団をも擁し、法や税制の確立したものである。そこに用いられた貨幣や書記言語は、社会全体の価値の基準を統一し、また、あまねくゆきわたらせることに役立ち、古代国家の形成に大きな力を与えることになった。

このことを別の面より見れば、国家（古代国家）とは、氏族集団のクニが大きくなり、法や税制が確立したものであるだけでなく、貨幣や書記言語という抽象物によってようやく統治が可能となるような、抽象的な存在体である、^(注2) と言うことができる。

(注2) 文字を創出した人々は偉大である。その「文字」は、周辺地域にも波及し、周辺地域にも国家が造られることを援けることとなる。必ずしも自らの文字を創案しなかった人々も、文字を手にすることによって、国力を蓄え、文化を拡大し深めることができた。

d、中世

中世を規定するものは、封建制度である。君主は諸侯を封じて土地を領有させ、領主は農奴に耕作をさせて年貢や

労役を納めさせる。この社会では、身分制があり、人はその身分や土地から移動することが難しかった。こうして、各々の領地内には、それぞれの文化が独自に育つ傾向が強くなる。言語も、階層による方言や、地域による方言など、それぞれの特徴をどんどん強めるに至った。一方で、中央と地方とを往来する諸侯・商人の間には、共通語が育っていった。

この時代に、ヨーロッパの列強は、市場を外に拡大し、植民地を作った。そうして、大航海時代以後、ヨーロッパの言語は、アジア・アフリカに宗主国の言語として広まっていく。同時に、アルファベットも文字を有たない国々に広まっていった。

e、近代国家

〈貨幣〉という抽象物は、〈資本〉という新しい抽象物を作り出した。蒸気機関の発明とその発達によって、急速に工業と交通が発展し、資本の蓄積も増大することになった。資本を増大させるためには市場を拡大しなければならぬ。そうして固定的な封建体制は崩されていった。がしかし、資本主義が自らの利益を追求するものである以上、そこに他者との攻防はまぬがれないものであった。

〈国〉を守るためには何が必要か。人心の統一と軍備で

ある。人心の統一のためには、宗教・言語を統一することがまず考えられ、そのためには教育制度を確立する必要があった。教会（寺）・学校・軍隊がその任にあずかっていた。

〈国〉が同じ民族によって構成されていれば大きな問題はない。しかし、どの国にも、異なった言語・異なった文化・異なった宗教に生きる人々はいるものである。平和に暮らしていたのに、ある日突然、大きな集団の勝手に制定した〈国〉の一員と決められ、その言語・その文化・その宗教を、大きな集団のそれに改めるよう強制された人々々々、どの国にもある。自らの非力のため、戦うことをせず、大きな集団に吸収されていった人々が、大勢あったのであった。

f、現代

二十世紀になって、資本主義に対するものとして社会主義が考えられ、第二次大戦後は、アメリカ合衆国とソヴィエト社会主義連邦共和国とが大きな力を保っていた間は、冷戦といわれながらも一応の均衡を保っているかに見えた世界情勢は、東西ベルリンの壁が破られ、ソヴィエト社会主義連邦共和国が崩壊した途端、混乱状態に陥っている。民族主義の名のもとにくり返される戦いは、これまで大国

や大集団におさえられていた人々の、自立の意志に基づき、また、報復の意図でなされている。私の言語・私の文化・私の宗教。もしも彼らに自立する力があるならば、独立させてあげればよいようなものの、同じその地に他の民族も暮らしているから、簡単に「独立」というわけにもいかない。

近代国家は「境界」(領土)を定める所から始まつたのであったが、それは、強者のとり決めたものであった。問題はそこに発している。「ボーダーレス」と言われる現在の様相は、近代が崩れ始めたことを意味している。「国」という単位ではない、地球規模の経済・政治・交通の行なわれている現在、これからは、国よりは小さな、ブロックごとの行政が行なわれていくであろう。

また、ユーロという大きな単位を作ったヨーロッパにおいて、貨幣が統一され、自由な交通がなされれば、民族という単位ではなく、利益集団がまとまっていくであろう。

そして、インターネットの普及により、地球規模の通信の行なわれ始めた現在、世界の共通言語は一つにまとまっていくであろう。それを学ばなければ、新聞も読めない(新聞に変わる情報伝達方法がいずれインターネット上にあるであろう)時代が、ついそこまで来ている。現在は問題の多い電子マネーも、やがて整備されて、新しい経済

の形態が生まれるであろう。

やがては、各国選出の議会が開かれ、地球警備隊ができあがるであろう。

その時間問題になるのは、地域格差と階層であろう。能力があっても、ある職業に就くことのできない人々の暴動、それは世界各地に現在もある問題である。他者に危害を加える集団や宗教——日本にも世界を震撼させた宗教が興つた。そういったものを一掃することは不可能であろう。そうして、そのような異端の中から、新しい世の中の動きが出来てくることもあり得る。常に世界は混沌として流動的であり続けるだろう。それでなくては、停滞・滅亡に至るだけである。

それでも、ただ成り行きに身を任せているだけではなく、一方で、人は安定をはかろうとするであろう。なぜなら、私たちは、創意工夫することに意欲を有ってきた動物であるからである。

そうした新しい世の中が始まる時、人々をつなぐものは言語である。言語は、それによって誤解も生み争いも起こるきっかけにもなり得るものではあるが、それが人間の意思疎通の最も発達した手段である以上、世界各地に通用する最低限の基準を言語に設けることは、これだけ交通範囲の広がった(地球規模になった)現在、私たちに課せら

れた任務である。

かつて、部族国家、氏族国家、国民国家を形成した時と同じ力を、地球国家の上に建設する責務が私たちにはある。そしてその一方で、それを強制するのではない叡智をも、私たちは歴史の反省の上に為さねばならないのである。それが、グローバル時代の現代の課題である。

今、私たちは、よりよい地球の建設を模索して行かなければならない。

(注3) 〈領土〉〈国民〉〈国家組織〉が近代国家構成の三要素である。

